

7月の生乳生産、消費(全国)

—生乳生産は増加率やや鈍る—

—順調に伸びる飲用消費—

農林省 8月20日発表の速報によれば、この7月の牛乳の生産、消費の状況はつぎのとおりである。

<生乳生産量> = 6月より8,901トン減少し、177,000トンで、この数カ月、前年同月に対して20,000トン前後上回っていたものが、猛暑の影響もあって16,000トン(109.6%)の増加にとどまった。

地区別には、前年同月に対して北海道が96.5%と下回ったが、他の地区はいずれも増加しており、なかでも中国、四国、九州の各地区の増加率が高かった。

<用途別消費量> = 飲用牛乳向け生乳消費量は、102,300トンで前月に比べ8,800トンの増加であるが、一方乳製品等向け生乳消費は59,200トンで、前月に比べ17,200トンの減少となっている。

これは前年同月の消費量に対して113.6%および103.1%にあたっている。

<乳製品生産量および月末在庫量> = 1～7月の生産量は、乳製品等向け消費量が16%増加しているのので、各乳製品とも増加しており、無糖れん乳、全糖乳大かんが約3割、加糖れん乳大かん、チーズが約2割、バター、脱脂粉乳が1割強の増加となっている。

<月末現在工場在庫量> = 前月末のそれにくらべバター、チーズが2割前後増加しているのみで、乳製品はいずれも2～5割程度の減少となっている。

[15ページより続く]

A農家は急傾斜改良牧草地2ヘクタールを用いて、輪換放牧により4月下旬から11月にわたり215日間2,012時間の放牧を行い、ジャージー牛に適応した飼養法がとられているが、難点は冬期のイネワラの利用が第一胃の生理上面白くないことである。乾牧草の確保に一層の検討を加えるべきである。なお冬期のエンシレーヂが3種の配合で与えられている点は好ましいことである。

B農家についてみると、いわゆる零細規模で水田の利用に主体をおいた山寄りの農家であるが草資源に恵まれていない。

ここでは水田裏作により牧乾草を多量確保し、年間の給与を実施し、また水田の畑作転換を大規模に行って基礎資料の生産を行っている。

この農家の飼養型はA農家とちがって舎飼型で夏季の飼料に問題がある。

ともあれ両農家とも経営的にはすぐれた内容をもつものであるが、2つの代表的なジャージー牛の飼養類型である。